

編プロ稼業25年――賀状からの報告

<1984年元旦－1>（会社用）

なごやかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。

昨年5月1日よりスタートしましたサンリード名古屋も、おかげをもちまして、どうやな新しい年を迎えることができました。

大海へ出た小舟のような思いはあいかわらずですが、それでもなにか「かたち」ができていく感覚を味わえることはありがたいことだと思っております。

ことしは、この「かたち」に見合うだけの「なかみ」の充実をはかることが第一の課題であると考えております。

今後ともあたたかいご協力・ご指導を心からお願い申し上げます。

<1984年元旦－2>（個人用）

ことしのお正月はいかがでしょう。男30歳にしてはじまった大阪→東京→京都の“放浪”は、やはり私の修業の旅であったような気がします。いま、ここ名古屋に帰り、伏見の事務所にて“本づくり”への夢を捨て切れずにおりますが、ふしぎに自分の運命の幸せを感じております。

いろいろな人に世話になり、いろいろな人に迷惑をかけて生きてきました。

ことしも多分に同じ姿をさらけ出すような気がします。とにかく、がんばりますので、よろしくおねがい申し上げます。

<1985年元旦－1>（会社用）

おだやかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

昨年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。

おかげをもちまして、サンリードも、また新しい年を迎えることができました。

昨年もあつという間の一年でしたが、それでもじつにおおぜいの方々との出会いがあり、新しい仕事もさせていただきました。とてもうれしいことです。

ことしは、もう一度本づくりの原点を見なおし、子どもたちや読者の方々の顔をつねに思いうかべながら、スタッフ全員が企画・取材・執筆・写真・レイアウト・デザインとなんでもこなせる行動的な編集制作集団へと脱皮していきたいと考えています。

ことしもあたたかいご指導・ご協力を心からお願い申し上げます。

<1985年元旦－2>（個人用）

ことしのお正月はいかがですか。また1年が過ぎました。

いま1年前と同じ場所に自分の仕事場と仕事机があることにふっとふしぎな思いがします。いままでの落ち着いた生活の中で、万物流転説ならぬ“自分流転説”をあたりまえのように思っているせいでしょう。それだけにことしは私にとってとりあえず平穏な正月といえます。

しかし、この1年をふりかえると、やはり変転の年でありました。

本づくり1年生のときから15年間も世話になった写植会社のIさんが亡くなられたこと。

3月から5月にかけての1000ページ近い中学教材の大仕事。

後半は、新しい仕事仲間との出会い。さらに前から期待していた出版社さんの仕事もはじまり、同社の人たちとの交流も生まれました。

ことしは、これらの広がり大切にしながら、いままでの仕事の集大成と名古屋における編集制作の基盤づくりにとりくみたいと思っています。

<1986年元旦－1> (会社用)

おだやかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。

おかげをもちまして、サンリードも、また新しい年を迎えることができました。

昨年は小学校教材の改訂期で、一年中仕事に追いまくられました。サンリードにとってはありがたいことですが、皆さまにはご迷惑をおかけしたり、ご無理をお願いしたりして、申し訳なく思っております。

今年でサンリード名古屋もはや三度目の正月となります。あいかわらず力不足でご心配をおかけしていますが、それでもお仕事を出していただく会社がいくつかふえ、とてもうれしく思っております。

今年は、私ども一人ひとりの編集能力の向上を合い言葉に、前にもまして一冊一冊ていねいな本づくりと神経のゆきとどいた制作業務を心がけたいと思っております。

本年もあたたかいご指導・ご支援を心からお願い申し上げます。

<1986年元旦－2> (個人用)

ことしのお正月はいかがですか。

あっという間に過ぎた一年間。あいかわらず赤ペン片手の編集稼業。紙の山にとりかかこまれ、小さな文字とにらめっこ。

思えば16年間、同じことのくりかえし。アホかバカかタワケかダラか。ペンダコさわりながら考える。それでも飽きずにできたての紙面と格闘。

いまはいつの間にか広小路通りをサンダルはいて歩くほど名古屋暮らしが板につき、思い出の大阪・東京は遠のくばかり。

酒を飲むたびに考える。人の出会いと運の不思議。ウーン。

また昨年はいまの身分もわきまえずチョーク片手に編集論。もって生まれた出たがり屋の性分と断りきれない気弱さでついつい黒板の前に立ってはみたものの、あちらこち

らに迷惑のかけっぱなし。いまどうしたものかと思案中。でもすごく勉強にはなっている。

ことしはどんな年になるのやら、自分でもまったく見当が付きません。でも、ややっこしい言い方ですが、退屈しない一年にだけはしたいものです。

こんな男ですが、ことしもよろしくお願い申し上げます。

<1987年元旦－1>（会社用）

おだやかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。

昨年は中学校教材の改訂期で、一昨年以上に仕事に追いまくられました。「忙しい」とは“心が亡ぶ”と書くようですが、忙しくなければ暮らしのほうに亡びますので、ありがたい一年でした。

また、昨年は若い人や現場経験豊かな人など、たくさんの仲間や出会いにもめぐまれた年でした。しかし、私どもの力不足で、皆さまにご迷惑のかけっぱなし、ご無理のお願いしっぱなしの年でもあったようです。申し訳ございませんでした。

今年はその反省を踏まえて、私ども一人ひとりの“プロとしての編集能力のさらなる向上”をモットーにがんばっていきたくて思っております。

うれしいことに、すでに大がかりな新しい仕事のお話をいくつかいただいております。

本年も皆さまのあたたかいご指導・ご協力を心からお願い申し上げます。

<1988年元旦－1>（会社用）

ことしもおだやかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。おかげをもちまして、サンリードも5回目の正月を迎えることができました。

昨年は学校教材の改訂期でないため仕事の少ない年になるのではないかと心配しましたが、今まで以上に仕事に追われた1年でした。それに新しい出版社さんとのお付き合いもはじまり、名古屋では少ない一般書籍・単行本の編集業務も本格的に取り組めるようになりました。サンリードの新しい“柱”として大切に、頑張っていきたいと思っています。

ことしは小学校教材の改訂期でもありますので、また多忙な1年になりそうです。それだけに私ども一人ひとりが汗と知恵を出し合い、さらにプロとしての編集能力の向上につとめ、ディレクションのできるスタッフへと成長していかなくてはなりません。それがことしのサンリードの第一課題です。

本年も皆さまからのあたたかいご指導・ご協力を心からお願い申し上げます。

<1988年元旦－2>（個人用）

ことしのお正月はいかがですか。

“あっ、happy new year!”ならぬ昨年も“あっ”という間の1年でした。

驚くなかれ、嘆くなかれ、いつの間にか不惑すなわち不和と誘惑の40歳。

でも昨年の秋、10年の“放浪”（放蕩と言う人あり）に終止符を打たんとするかのよう
に、政府の内需拡大政策に協力するかのようになり、近所の人には“ちょっと
気になる変わった家”との評。好奇心旺盛のかたはぜひお立ち寄り。

さて“チョーク片手の編集論”もはや3年。歯の浮くようなこそばゆい言葉をしゃべ
るのも平気になり、「お前らはアホか！」とだれかの真似をして学生たちをどなりまくる
のも板についてきた。

編集稼業を一生の生業と決めたわけではないけれど、20年近くも続けていると、これ
から志す連中に言いたいことはいろいろあるみたい。

新しい年に祈願することはただ一つ。家内安全、商売繁盛、夫婦円満、無病息災、交
通安全、頭脳明晰、感性芳純、風光明媚、人情豊熟、所得倍増、晴耕雨読、……えーつ
と、ほかには一。

いつもはこんなアホなことをいう男ではないのですが、ことしもよろしくお願いま
す。

<1989年元旦－1>（会社用）

おだやかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中はいろいろとお世話になり、ありがとうございました。おかげでサンリードも6回
目の正月を迎えることができました。

昨年は、子供英語教材、高校入試教材、64年度版小学校教材の仕事が中心でした。そ
れぞれたいへん規模の大きい仕事で、いろいろと勉強させていただきました。また情報誌
や社内報の仕事に加えて単行本の編集や教材のデザインの仕事もいくつか携わることが
できました。

今年は小学校教材の改訂作業に中学校の65年度版の仕事が加わります。また新しい
雑誌づくりの話もあり、サンリードとしてはまさに飛躍の年です。同時に心を引き締
めてがんばらなければいけない年でもあります。サンリードはまだまだヒヨコです。
一人ひとりがもっと力をつける必要があります。「ていねいな仕事をしよう」――
これをサンリードの今年の第一のテーマにしたいと思います。

本年もみなさまのあたたかいご指導・ご協力をお願いします。

<1989年元旦－2>（個人用）

今年のお正月はいかがですか。

また一年が過ぎました。一度はじっくりと下絵を描き、一週間ほどかけて版画なんぞ
を掘り、優雅な年賀状を作りたいのですが、またまた今年も11級の文字（今回は平①）
で紙面を埋めようとしています。昨年は二律背反の世界にどっぷり浸かっていました。

最も現代的な知的生産ツールといわれるパソコンなるものに挑戦し、毎晩一太郎と忍
者ごっこ。真夜中目を擦りながら一人じっと画面を見つづける姿は不健康の極致とい
われてもしかたがありません。かと思うと、サファリルックに身を包み、突き出た
お腹に流行のウエストポーチを巻いて、野外活動のシンボルツールでもって近所の
柿を盗（いや撮）ったり野鳥や野良軒を追いかけたりと、いやはやテクノストレス
とアウトドアの世界を行ったり来たり。

また本業だけでも多忙きわまる中、あいかわらずのチョンボ講師稼業。さらに40
歳を過ぎたらあ

とは正月がくるたびに1歳ずつ若くなると堅く信じ、新しい自分を求めてさらに挑戦！一二律背反どころか十律背反の一年でした。まったく「ろくなもんじゃない」生活ですが、いったいどうしたらいいでしょうか。

答えを教えていただいた方にはカード型データベースソフト「忍者2」かハンディカメラの基本テクニックを教えます。

ことしもよろしくお祈りします。

<1990年元旦－1>（会社用）

おだやかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中はいろいろとお世話になりありがとうございました。おかげでサンリードも7回目の正月を迎えることができました。

昨年は中学教材の改訂作業に追われました。3年に1回の大仕事。それも半年間で全点制作という超過密日程。いまやっと荒れ狂う大海から自分の小さな港に帰ってきた感じです。

この嵐の中で、サンリード丸にまた新しい仲間が加わりました。外部の協力者も増えました。

今年もまた新しい海へ乗り出します。今までのような風まかせのサンリードではもう乗り切ることにはできません。大きくなった船は沈みやすい。動きも鈍くなる。今年は、これからの長い航海に耐えるために、一人ひとりが力をつけるだけでなく、みんなで知恵を出し合い、傷んだ船体を修復し、船底のよごれを払い、新しい帆を張って、強靱でしなやかな「新生サンリード丸」をつくる年です。

本年もみなさまのあたたかいご指導・ご協力をお願いします。

<1990年元旦－2>（個人用）

今年のお正月はいかがですか。また一年が過ぎました。自分が少しも進歩していないような気がします。昨年は、寝る以外は仕事をしていました。9月以降4か月間連続日曜出勤。しかもその日のうちに帰宅する日は週に一、二度。頭髪も伸び放題。姿だけは〇〇教の教祖様みたい。これでは体も心も狂うのは当たり前。周りまで変になっていく。

そこで一大決心。今年の仕事はしない。絶対にしないぞ。遊びの年、人生を楽しむ年、充電の年にしよう。一太郎や忍者、ロータス君と思いきりパソコンごっこ。西洋体験もやってやろうじゃないか。アテネやローマは僕の精神的な故郷だったし、パリやウィーンは憧れの街だったはずだ。いったいその思いはどこに行ってしまったのか。それに醜く太った肉体も何とかしなくてはいけない。会社の近くに見つけたダイビングスクールに週一回は行こう。……と、いま唯一の楽しみである夜中のひとり酒に酔いながら、ひそかに決意。ただ酒の力を借りた決心は未だかつて一度も実行されたことがない。すでにいくつかの仕事も断り切れずにまた新しい年を迎えてしまった。

だから自分は少しも進歩していない気がするのです。

今年のキーワードは「勇氣&遊氣」。でもまた「憂氣&誘氣」になりそう。

本年もよろしくお祈りします。

<1991年元旦>

新年明けましておめでとうございます。穏やかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。

昨年10月1日よりスタートしましたエディットですが、とりあえず初めての正月を迎えました。

8年前、サンリード（名古屋）をはじめたときは、新年のご挨拶に「大海へ出た小舟の思い」と書きましたが、いまは「滝壺に浮いた木の葉」のような状況です。何が何だかさっぱり分からないままもがいています。それでも、少しずつ形ができていく感覚を味わえるのは、助けていただいた皆さんやすばらしい社員の「おかげです」。

エディットの事務所からは、すぐ前に JR の各線路、左に名古屋駅そして西かなたに鈴鹿の山々が一望できます。3か月過ぎたいま、秒刻みの列車の音にも慣れ、すじ雲を茜色に染めながら鈴鹿連峰に消える夕日や駅西の夜景にも馴染みはじめました。

「教育図書教材の制作」「受注編集」「文章加工業」などと銘打って出発したエディットですが、果たして皆さんのお役に立てる会社になれるでしょうか。

新年を前に今年のキーワードを探そうとしましたが、なかなか見つかりません。そこで今年は、皆さんに気軽に付き合っただけの会社を目指して「どんな流れにも沈みそうで沈まない木の葉」の心意気で、とりあえず歩きはじめます。

<1992年元旦>

新年明けましておめでとうございます。穏やかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。

編集稼業23年、受注編集業10年、編集講師業7年、編集会社業は2年になりました。この間、名古屋→大阪→東京→京都→名古屋と、業界の片隅を歩きながら、本づくりやそれに関わる人たちのいろいろな面や姿を見てきました。お世話になったかたもB5判の住所録2冊では足りないほどで、この稼業がつくづく人とのつながりで成り立っていることを感じています。自分自身を振り返れば失敗と後悔の連続で、明らかに多くの人に助けられてここまで来ました。

これからは、できることなら少しでも自分の経験が皆さんのお役に立てればよいなと思っています。

今年は新年早々いくつかの大型企画やレギュラーの大物仕事が始まります。自分とエディットの編集総合力をぶつけるつもりです。

新年を前に今年のキーワードを探したら、次の4つになりました。①「和進」（去年の猛進&盲進を反省して）、②企画力、③電子編集、④自社出版（できたら1冊でも）

夢はいっぱいですが、夜遅く布団の中で見る夢は残念ながら一度も実現されたためしはありません。

とりあえずどうなるか分からない大きな川の流れに向かって、今年も「沈みそうで沈まない木の葉」の心意気で、またスタートいたします。よろしく申し上げます。

<1993年元旦>

新年明けましておめでとうございます。穏やかなお正月をお迎えのこととお慶び申し上げます。

旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。

またまた一年に一度の反省文で申し訳ありません。変わっていないな、恐ろしいほど変わっていない—今の自分の心の状況が1年前とほとんど同じ。追われっぱなし、流されっぱなし。確かにたいへんな年でした。おかげで多少売上げも伸びたし、白髪はもっと増えた。事務所も3室になり、一時は社内スタッフも30人を超えた。

しかしなんといっても写研出力可能なスーパーDTP「大地」の導入はエディットにとっても私にとっても画期的な“事件”でした。大げさにいえば編集技術の革命だ。若い人がうらやましい。45歳になって10冊近いマニュアルと戦わなければならない。少ロット・少コスト・多品種の本づくり—これこそが出版の本質だ。おまけに仕上がりそっくりのプレゼンと期間の圧倒的な短縮が可能。

おっと大事な反省文の中身がそれでした。それでも自分は変わっていない。もう8年になる編集講師稼業も楽しんでいるし、多少したたかに生きることも覚えた。あとはなんとかしなやかに世の中を渡りたいと思う。

したたかにしなやかに—すばらしい。でも現実はいさ少しも変わっていない。

いまエディットの窓から大きな冬の夕日が鈴鹿の山に沈んでいくのが見える。手元のパソコンもオレンジ色に染まっている。

新しい年はどうなるのか。世間は冬彦から春彦へ。しかし我々は激しい夏から一気に冬だ。長い冬がやってくる。困ったな。どうしよう。でもよく「変化や危機は人を成長させる。逆に新しいチャンスだ」という。「艱難汝を玉にす」ということか。その言葉をとりあえず信じて、二年前から決意した縄文人的生き方を再度肝に銘じて、新しい年を歩きだそう。

<1994年元旦>

新年明けましておめでとうございます。今年も穏やかなお正月をお迎えのことと思います。旧年中はたいへんお世話になりました。おかげさまでエディットも4回目の正月を迎えることができました。私にとってはあっという間の3年、走り続けた3年間でした。

昨年は辛く心の痛いことがありました。しかしみんながんばってくれました。年の終わりまで仕事に追われました。また予想以上にスーパーDTP「大地」が活躍してくれました。編集・割付・組版が自由自在に安価にそして短時間にできるだけでなく、希望に応じてDTP出力と写研出力が使い分けられ、おまけにデータはテキスト形式と大地（写研）形式の両方で保管でき、いつでも再利用できる点、また原稿から版下まで一貫して委託できる点が喜ばれた理由だと思います。いまエディットでは3台の大地と5台のPC98が稼働しています。イラスト・図版を含めて編集・制作業務をすべて社内で行うことができ、製品管理、納期管理にもたいへん役立っています。時代にマッチした本づくりだと自負しています。

今年は教材改訂作業の閑散期に加えて、児童・生徒減による業界の低迷と深刻な不況が重なってたいへん厳しい年になりそうです。編集業26年、受注業10年、社長業3年の経験がどう生かされるか。まさに私にとって試練の年といえます。それだけに新しい年のスタートから取り掛かせていただける仕事があることはたいへんありがたいこと

です。みなさんに「ん？」ではなく「ん！」といわれる本づくりをめざして、この試練を乗り切っていきたいと思います。

じつは私には密かに気に入った風景があります。週一回の編集講師業のあと、夕方いつも車で名古屋の桜通りを西に向かって帰るのですが、そのときに見る街の景色はなぜか気持ちを和らげてくれます。ビルの間に沈もうとする夕日、茜色に染まったセントラルブリッジやアネックスビル、そして灯り始めた高層ビル群の窓の明かりやビジネス街のネオン、街の昼と夜が交替する時間、その景色を眺める数分間だけは、これから事務所で待っている仕事もいま抱えている悩みも忘れて、不思議といままでの自分の人生を肯定的に感じさせてくれるのです。それは夕日に染まる名古屋の街の景色同時にかつて世話になった大阪・東京・京都の人々や風景を懐かしく思い出させてくれるからでしょう。

さて新しい年の景色はどうなるか。今年は皆目見当がつきません。とりあえずカーネギーが教えてくれたように、あまり先のことは考えずに、危機は新しい変革のときと位置づけ、きょう一日をまず精一杯生きていこうと思う。

<1995年元旦>

あけましておめでとうございます。今年も穏やかなお正月をお迎えのことと思います。旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。おかげでエディットもなんとか5目の正月を迎えることができました。

昨年は東京へ行く機会がぐんと増えました。お仕事をいただける会社が東京にいくつかできたということもありますが、同業者の親睦団体である日本編集制作会社協会の理事を柄にもなくお引き受けしたせいです。

東京はあこがれの街でした。西三河の田舎高校生にとって、都へ行きたいという中央志向はたいへん強く、自分にとって最初の大きな挫折はやはり東京の大学にいけなかったことかもしれません。それでも縁あって、十数年前、2年間ほど東京で暮らしました。単身赴任ですが、編集者として比較的大きな仕事に携わり、毎日わくわくした気持ちで働いていました。訳あって東京を去ることになり、帰郷の新幹線の中で泣いたことを思い出します。これからの暮らしの不安に加えて、それ以上にこの2年間で出版・編集の中心が否応なく東京であることを知らされ、その世界から離れなくてはならない自分が辛かったからです。

それから13年が立ちました。いまこの名古屋で何とか編集稼業を成り立たせたいという思いをバネに仕事をしていますが、東京はやはり出版文化の中心です。理事の仕事を引き受けて、東京の編集者たちに接して改めてそう思います。親しい人も何人かできました。郷愁としての東京ではなく、学んだり、自分の位置を確認したり、仕事を見つける対象として東京とつきあっていこうと思っています。エディットの事務所から2時間足らずです。

今年は小学校教材の改訂作業が始まります。エディットには小学校の教員を10年以上経験した編集者が3人います。大いに仕事を期待しているのですが、果たしてどうでしょうか。私も26年間教材づくりに携わっています。企画の段階からご相談いただければ、

多少はお役に立てると思っています。またエディットにはDTPを扱える編集者も増えてきました。編集・割付・組版に加えて図版作成も自由自在にそして短時間にでき、写研出力も電算写植なみにできるDTPは大好評で、一般書・雑誌・カタログの編集だけでなく教材の制作にも活躍しています。

いままでの苦労が実ってほしい、社員の総合した力が生きる仕事ができたらいいな—そんな一年に今年はしたいと思っています。

私は毎日、車で通勤しています。朝の渋滞には退屈していました。最近気持ちのいい道を発見しました。ほんの少し回り道ですが、車も比較的少なく時間も短縮できます。庄内川という河川の土手を走るのです。広々とした風景、ゆったりと蛇行する水、一緒に流れる百羽以上の白や茶色の水鳥たち。「今日も一日がんばろう」という気にさせてくれます。

人はやはり何か楽しみを1つでも見つけて、はじめて前に進む勇気が出てくるようです。

<1996年元旦>

明けましておめでとうございます。今年もおだやかなお正月を迎えられましたでしょうか。旧年中はなにかとお世話になり、ありがとうございました。おかげでエディットもなんとか6回目の正月を迎えることができました。

昨年は日本編集制作会社協会主催の「'95 編集プロダクションフェア」に参加し、はじめてエディットのPRをさせていただきました。もともとは同業の皆さんとのお付き合いをかねて、各社のお仕事を拝見させていただくことが目的でしたが、たくさんの出版社のかたにエディットのブースに来ていただきました。ありがとうございました。

この業界で26年の長い間仕事をさせていただき、エディットという編集会社を始めて5年3か月になりますが、いままでほとんど自分の会社の宣伝をしたことがなく、仕事の確保も流れに任せていましたので、たいへんいい機会であったと思っています。

私の名古屋での受注編集業も今年で14年目になりました。一昨年からは東京へ行く機会が増え、また昨年は大阪へも出かけることができました。

東京も大阪もかつて単身赴任の形で編集者として生活をしたことのある街です。お世話になった人や親しくなった人も含めて、思い出がいっぱいある街です。会社を辞め、組織も離れ、この名古屋で全く違った形で新しい仲間と編集会社を作ってきた自分にとって、いま再び当時の街並みに出会えることが不思議で仕方ありません。新宿も心齋橋も十数年前の景色をきちんと残してくれています。

当時、大阪への行き帰りはいつも近鉄を利用していました。山合いを縫って走る車窓の風景が気に入っていたからです。先日大阪から久しぶりに近鉄で帰りました。風景は全く変わっていませんでした。それぞれ山の窪みには集落があり、川が流れ、道があり、神社と寺があり、民家があり、そして必ず駅がある—人々の暮らしの基本形でしょうか。以前に何度も眺めた風景です。

私はいまも庄内川の土手を利用して車通勤していますが、最近発見したことがあります。土手はほとんど直線でできていますが、川はその横をきちんと蛇行してゆったりと

流れているのです。そのとき、自然は曲線でできているのではないかと思ったのです。真っ直ぐに見える竹でさえ、しなやかな丸みを持っています。自然物に直線を見つけるのはむずかしいようです。反面、人工の物は建物や道路などほとんど直線を基本に作られています。神は曲線を作り、人は直線を作ったと直観したのです。と同時に自分の日々の生活があまりにも直線的であることを感じたのです。

一日一日があつという間に過ぎていきます。考え方や発想・人との付き合いまでが直線的です。神に逆らいつづけている気がしたのです。

新しい年を迎え、なにか一つ決意をすれば、いまの生き方をする以上、一日一日を愛でるように、味わうように、いと惜しむように暮らすことは不可能だから、せめて月に一度くらい気の置けない人とおいしい酒を飲む、まろやかな機会を作りたい。

<1997年元旦>

今年も穏やかなお正月を迎えられましたでしょうか。旧年中はたいへんお世話になり、ありがとうございました。おかげをもちましてエディットも7回目の正月を迎えることができました。

会社を始めて以来、時のたつ速さと日々の喜怒哀楽の激しさにいつも驚いています。

去年はたくさんの仕事をいただきました。社員がみんな頑張ってくれました。何人かに苦しい思いもさせてしまいました。しかし我々受注編集者は現代の縄文人です。古代のようにいつも豊かな森や海に恵まれているわけではありません。四年に一度の収穫の年を狩猟採集民族として必死で頑張るしかありません。おかげで新しい年を迎えられました。仕事を出していただいた版元の編集者の皆さん、ありがとうございました。

エディットは昨年、編集のデジタル化をさらに進めました。早くからDTPを取り入れ、コンピュータを使った編集システムを作り上げてきましたが、去年はデジタル編集のネットワーク化を目指し、ISDNの導入、新たなハード・ソフトの設置、ニフティやインターネットサーブへの加入、原稿の送受信や情報収集、より精度の高いDTP編集、版下を作らない直接フィルム出力納品など、開かれたデジタル編集体制を実現しました。その第一作目として作らせていただいた『小・中学生のためのインターネット入門』が昨年末に刊行されました。編集のデジタル化は今後予想できない放射的な可能性を秘めています。エディットの若い編集者たちがこの名古屋の地でその推進役となればと思っています。

去年でいちばんうれしかったことは、学生時代の親友の本を出版することができたことです。正確に言えば、エディットで編集と制作を行い、これまた私の大学時代の親友が経営する出版社から出してもらいました。『子育ては自分育て』という本です。金沢で心身に「障害」を持つ子どもたちの生活と成長に20年以上つき合ってきた彼の本をいつか自分の手で出したいという長い間の念願がやっと叶いました。「のんびり、ゆっくり生きることの心地よさ」をいちばん大切にしている彼の暮らしと生き方はまさにいまの私と正反対です。どちらが人間的かといえば答えは明らかです。しかし自分の運命はそう簡単には変えられないません。だからこそ彼の本を作ってみたかったのです。秋の初め、彼の仲間が開いた金沢での出版パーティに出席させてもらいました。著者と出版者と編

集人が同級生であることをみんなに羨ましがられました。次の日、久しぶりに三人でゆっくり金沢を歩いてきました。三人そろっての再会は卒業以来です。30年前の母校は全面移転のため廃虚と化していました。青春は確実に遠のいていたのです。

私の暮らしは相変わらずです。編集の講師稼業はもう13年、編集制作会社協会の理事もはや三年。東京へもよく出かけます。東京の友人も増えました。庄内川の土手を利用した車通勤も楽しんでます。新しいことといえば、編集や本づくりについて発言したり、小文を書いたりする機会がふえたことです。

でも自分という舟を漕いで49年、昨年とはとくに忙しく、心身ともにあちこちが傷み始めました。今年はとりあえず自分の修理の年と決めました。

<1998年元旦>

今年のお正月はいかがでしょう。穏やかな新春を迎えられましたでしょうか。昨年はお世話になりました。おかげをもちましてエディットもなんとか8回目の正月を迎えることができました。ありがとうございます。

私の毎日はいかわらず失敗と後悔の繰り返しで日々の反省は病気になるくらいやっていますが、長い一年間の反省はやはりこの賀状を書くときだけのようです。

昨年はあまり思い出に残ることがありません。苦しかった記憶のほうが多いようです。会社としては過去最高の売上げがあり、社員の数も増え、オフィスの部屋も4室になり、新しい体制もでき、久しぶりの社員旅行も実施することができました。でもなぜか辛い一年であったような気がします。社長業のむずかしさを痛感した年でした。

昨年9月で私は満50歳になりました。11月に小学校時代の同窓会に出席しました。浦島太郎的ショックがありました。そこでいろいろ考えました。当たり前のことですが、年齢は一つだけではありません。私の編集稼業は学生時代の機関誌や同人誌の編集歴も入れると30年、ともに失格ですが夫稼業は28年、父親稼業は27年。専門学校の講師業は14年、社長業は7年、日編協の理事は4年。残念ながら「失樂園」歴は0年ですが、人は生存年数以外にもさまざまな年齢があるようです。いろいろな歳があることはうれしいことですが、自分という舟を漕いで50年、いま最も大切にしたい年齢はどれなのか、振り返ってみたくになります。

今までの私の人生はほとんど七年サイクルで変化しています。最初勤めた名古屋の出版社は七年で辞め、東京の出版社に拾われて大阪・東京・京都と単身赴任を続け、やはり七年後に退職しました。名古屋に戻って雇われ編集長を七年。そのときの社長にはたいへん世話になりました。私の最大の恩人です。そしてエディットをつくっていま七年が過ぎました。七年目に転んで八年目に起きる――これが小林流「七転び八起き」です。さて今年は5回目の「八起き」です。はたしてどんな展開になるのでしょうか。

辛いとき、慰めてくれるものはやはり風景です。庄内川の河口は新川と日光川が合流し、名古屋では数少ない渡り鳥の楽園になっています。野鳥たちは一見おだやかに水に浮かんでいます。しかし、よく見ると必死で餌をついばんでいます。またいつか遠い遠い渡りの旅に出なければならぬのです。河口の西に沈む夕日がたくさんの水鳥たちを紅く染めています。「分け入っても 分け入っても 青い山」と歌った山頭火をまねて、

こんな句を作ってみました。

すべて たまたま 歳の風

いまは里山 むかしは海辺

街に住むなら せめて ビルの狭間に沈む 真っ赤な夕日

そして またいつか 渡りの空へ

<1999年元旦>

また新しい年がやってきました。今年も穏やかなお正月を迎えられましたでしょうか。考えてみれば、毎年毎年同じ安らかな気持ちで新年を迎えられることはとても幸せなことです。なかにはたいへん辛い思いをしながら元旦を過ごされる人もいます。私もどちらかという、エディットを始めてから穏やかな元旦を迎えた記憶がありません。でも、おかげをもちまして、エディットもなんとか9回目の正月を迎えることができました。

昨年もしろいろなことがありました。一言で言えばやはり辛い年でした。いや辛いことに慣れた年でした。自分の無力を知らされた年と言っていいかもしれません。いま思うと20人以上の所帯を維持できたことが不思議な気がします。プロダクション業界はどこも良い話を聞きません。でもエディットにお仕事を出していただいた出版社さんや印刷会社さんのおかげで、なんとか新しい年を迎えることができました。感謝しています。それでも昨年は内外ともにやはり厳しい1年でした。

個人的にも辛い1年でした。とうとう「花嫁の父」という立場に立たされました。長い間いっしょに暮らした娘が自分のそばから離れることはやはり辛く寂しいことです。父親はそれに耐えるしかないようです。また頬に腫れ物ができ、2回ほど手術をしましたが、傷が残りました。これで本物の渡世人になったわけですが、望んだ人生ではありません。ほかにも辛いことはありましたが、もっと辛い思いをしている人を知っています。これ以上は書けません。

嬉しかったこともたくさんあります。エディットのホームページを開設してから、仕事や就職の問い合わせ、版元さんとのメールのやり取りや業務のデジタル化、SOHOの人たちとの交流がたいへん活発になりました。地方の編集プロダクションにとって、インターネットの恩恵は計り知れないものがあります。アウトソーシング時代のせいかエディットの編集力が少しずつ評価されてきたためかわかりませんが、新しい版元さんとの取り引きも増えてきました。

個人的にいちばん嬉しかったことは自分の初めての著書が出版されたことです。『なる本「編集者」』（週刊住宅新聞社刊）という本です。私の15年間の編集講師稼業の内容をまとめたものです。いままで他人の本はたくさん作ってきましたが、自分の本を作ってもらうのは初めてです。うれしいやら恥ずかしいやら、妙な気持ちです。これも日本編集制作会社協会の理事をやらせていただいているおかげです。

私の暮らしはほとんど変わっていません。月に一～二回の出張（東京以外の地区も増えました）、週一回の講師業、あとは会社で編集と経営の二足のわらじ業。ちょっとちがうのは、娘の代わりに愛犬JOYが家族の一員になったこと。私のおそい帰宅をちゃんと

待っています。

蒼い海，広い空，暖かい日光，緑の山に囲まれて，半農半魚の自給自足生活—そんな暮らしをしたい思いが強くなるこのごろですが，今年から教材改訂の大波がやってきます。エディットが業界の中できちんと安定的にお役に立つ確かな会社になるまで，その夢はしばらく遠くへ追いやるしかありません。

<2000年元旦>

大海の小舟もゆらり揺られて 10 年目—明けましておめでとうございます。今年も穏やかなお正月をお過ごしでしょうか。皆さんのおかげでエディットも 10 回目の新年を迎えることができました。ありがとうございます。私の初詣はいつも同じ名古屋の大須観音。願いもやはりいつも同じです。「私もがんばりますので，なんとか今年 1 年，エディットをよろしくお願いします」。この初詣，会社を始めてから一度も欠かしたことはありません。無神論を標榜する私がいい加減なもんですが，なんとか 10 年目を迎えることができたことは夢のようです。

人に会い，人と話して一年過ぎる—昨年はまさにそんな年でした。版元の編集者の方だけでなく，業界関係の方がおおぜいエディットを訪問されました。一様に，厳しい業界の今後を心配されて，新しい情報を求めて来られました。また，外へ出る回数も大幅に増えました。毎週のように出張していました。小学校教材の改訂期に入ったせいもありますが，日本編集制作会社協会の仕事や—昨年暮れに出した本『なる本「編集者」』（週刊住宅新聞社）の縁でちょっとした講演を頼まれたりして，よく出歩きました。編集稼業が「人と会う仕事」であるならば，昨年はじつによく仕事をしたことになります。

知命の歳過ぎて，どっぷり漬かる電腦世界—『お母さんのインターネットわくわく BOOK』『DTP ワーキング実践プロセス』『CG 技のチップス』，これらは昨年エディットで編集・制作したデジタル系出版物です。今も『女性のためのオンラインショッピングわくわく BOOK』『お母さんの SOHO わくわく BOOK』などインターネット関連の単行本をいくつか制作中です。以前からインターネットやホームページを仕事の受注や求人活動に役立ててきましたが，いまではそれをテーマにした出版物を手がけるようになりました。今年なんとか編集者の横のネットワークを作りたいと思います。でも本音を言えば，デジタルという世界は人間を本当に幸福にするかどうかいつも気になっています。

デジカメ持って愚犬と散歩，撮った写真は 1500 カット—私のいまの楽しみは 2 歳になる愛犬 JOY と家近くの河原をぶらつくことです。間抜けな顔をしたミニダックスで，冬は私のあんか代わりですが，家族の危機を救ってくれたようです。

辛さを楽しむ—「変化に挑戦！」。これが今年キーワードです。昨年は社員の編集力の向上を目標にした「一人ひとりのレベルアップを！」がテーマでした。しかし 2000 年はあらゆるものの転換期だといわれています。時代も業界も自然も人間も世の中のあり方も我々の生き方や考え方も大きく変わっていく予感がします。既存の価値観や手法に囚われないで生きていくことを求められる時代になります。昨年の賀状に「辛いことに慣れた 1 年」と書きましたが，今年もたくさんの「辛さ」が待ち受けています。いっ

そ「辛いことを楽しむ年」にしてみようと思います。

そして、はるか遠い夢は、モバイル片手に四国八十八カ所霊場めぐり、エディネットうまく行ったら「超隠居」(板崎重盛)そして「たかが詩人」(黒田三郎)ーいつかはすべてに納得できる日々を目指して。

<2001年元旦>

あけましておめでとうございます。今年も穏やかな正月をお過ごしでしょうか。エディットはおかげで11回目の新年を迎えました。その前の7年を加えると、受注編集業は18年目になります。下請け稼業をよく飽きもせず…と思われるかもしれませんが、いまの出版社や出版人の生きざまについて、私の視点から見えてくるものがいくつかあり、けっこう自分の立場を楽しんでいます。大きな声ではいえませんが、もっとこうあったらいいのになあと思うことがたくさんあります。

エディットの昨年の最大のできごとは新しい“砦”を作ったことです。4 room から1 office へ! いままでマンションの部屋を4つ借りていましたが、1フロアの事務所に引っ越しました。引っ越しといっても同じ建物の9階から1・2階へ移動しただけです。1階が玄関で2階が事務所。住所も同じです。代表の電話番号・FAX番号もそのまま。ただ部屋名がフリーベル 915 からフリーベル1Fになっただけです。でも、およそ70坪ありますので、28名のスタッフが入ってもとてもゆったりした感じでした。背丈ほどの観葉植物もいくつか配置でき、いままでのエディットのイメージとだいぶ違います。ぜひぜひ一度お立ち寄りください。

昨年のもう一つの成果は「EDINET」を作ったことです。「編集者の編集者による編集者のためのWebサイト」。すでに3000名近い編集者のかたにアクセスしていただいています。情けないことに立ち上げたままです。リンク集としては多少役立っているようですが、私のめざすものとはほど遠い状態です。今年は何とかコミュニティとしてのホームページに近づけたいと思っています。

昨年のエディットの教材部門は小学校教材の改訂に迫られました。プリント・ドリル類だけでなく、基本教材であるテストの仕事も国語・算数の教科をやらせていただきました。また、新しく環境教材や小学英語教材、パソコン教材の編集制作も委託されました。一般書部門では女性や小中学生向けの「インターネット本」を何点か手がけましたが、何といてもNHK総合テレビで放送中の『その時歴史が動いた』(KTC 中央出版刊)シリーズの仕事が大きかったと思います。昨年までに3巻編集させていただきました。今年も続行します。

個人的には多忙な一年でした。なぜか年々忙しくなっていくようで、心がどンドン亡んでいきます。編集稼業32年、編集講師業も17年、エディットを作って11年、日本編集制作会社協会理事の仕事も6年になります。週の前半は名古屋、後半は東京や大阪に出張するパターンが定着してしまいました。唯一の楽しみであるデジカメ持って愛犬JOYとの散歩は月1回もできません。

今年のキーワードを探していたら、ある会報が届きました。金沢にある障害児のための通園施設「ひまわり教室」の「教室だより」200号でした。施設を、寄付と善意とバ

ザーを頼りに 26 年間運営し続けてきた友人がこう書いていました。「北陸人の取り柄は粘ること、ほかになにもできないけれど、粘ることだけはできそう。それでやっぴいこう」―― 26 年間の施設運営の原動力は「粘り続けた」結果だそうです。今年のキーワードは彼の言葉を借りて「粘り」にしました。私もいい加減なものですが、本年もよろしくお願ひします。

<2002年元旦>

あけましておめでとうございます。今年のお正月はいかがでしょう。不況・テロ・米軍のアフガン侵攻・狂牛病・児童殺傷など、暗い事件ばかりで幕開けした 21 世紀。神は人類という「種」が生存に値する生きものであるかどうか試そうとしているような気がします。第二の創世記。我々は果たしてノアの箱船に乗れるのでしょうか。

昨年は文字どおり東奔西走の一年でした。この稿も関西からの帰りの新幹線の中で書いています。予定ではこれから名古屋を素通りしてそのまま東京へ直行。しかし急用ができ、いったん地元へ途中下車。地元へ途中下車なんて。とくに年末はこんな毎日でした。

人に会い、人を知り、人と話し、人に学んだ一年。エディットも 12 年たち、いま 70 坪のフロアに 40 人近い仲間ができました。輝いている奴、元気いっぱいな奴、頼りない奴、先が心配な奴、沈んでいる奴、まあまあな奴、急に力をつけてきた奴、いろいろです。エディットは編集道場、会社は砦、給料は心配料、仕事の報酬は仕事、社長は親方・師範。ノウハウ・人脈を盗めるだけ盗め！ いつもこう言い続けてきました。若い仲間が多いため、まずはビジネス社会や出版業界で「生きる力」の基本を身に付けさせたいと、毎日怒鳴りまくっています。自分は本当はとても優しい人間なのですが、会社にいると、いつの間にか鬼の社長になってしまいます。夕方になると、いつも声が潤れています。

でも私には「ひとり」を楽しむ場所がいくつもあります。新幹線の車中、新宿の定宿、社員のいない会社、深夜または夜明け近くの我が家（いつもそのころ帰宅する癖がついてしまいました）。一杯やりながら、その日のたくさんの後悔を飲み干す時間です。でもやはり一番の楽しみはデジカメ片手に愚犬 JOY との散歩です。世の中、いま映画も本も「癒し」が最大のテーマ。私も JOYのおかげで癒されています。私も生きもの、JOYも生きもの。生きもののあり方をきちんと教えてくれます。

私の母親は私が二十歳のとき、43 歳で死にました。いま私は 54 歳。もう 10 年以上も長く生きています。家族に「私のいまは余生だ」とよく言っていますが、「それにしてお父さんはあまりにもパワーがありすぎる」と皮肉られます。

二十歳のころ、「社会変革なくして自己変革なし、自己変革なくして社会変革なし。万人の幸福なくして個人の幸福はあり得ない」と口癖のように唱えていたころでした。欲望や感情より倫理を優先させた時代。毎年、金沢から東京・高田馬場へ無賃乗車を成功させ、フランスデモに出かけました。いま高田馬場といえば、親しくなった仕事仲間に誘われて行くカラオケスナックの場所。あの時代はあまりにもはるか遠くに行っていました。

本づくりに携わって 33 年。そろそろ自分なりの答えを出す時期になりました。でもいま未曾有の出版不況。いったい何ができるのか。不遜な言い方ですが、いまこそ「ほんもの」を見抜く力が求められている気がします。真に美しいもの、真に正しいもの、真に心地よいものとは何だろう。「なぜエジプト・メソポタミアの世界二大文明を生んだ中東の地に、いま争いが集中するのか」。気になることが増えました。

今年のキーワードは「粘り」。今年は「ほんものを見抜く力を養う」にしたいと思います。

<2003年元旦>

あけましておめでとうございます。今年のお正月はいかがでしょう。世の中、暗い事件と不穏な動きばかりで、嫌な予感がするこのごろです。それに内外のリーダーたちの狭量を新聞紙上で日々見せつけられ、腹立たしい思いを抱いているのは私だけでしょうか。

それに比べ去年のエディットは皆さんのおかげでたいへんすばらしい一年を送ることができました。小中同時改訂の波に乗り、過去最高の売り上げを達成することができ、念願だった海外社員旅行も実現と言いたいところですが、残念ながら国内の海外旅行をさせていただきました。総勢 30 名の 2 泊 3 日沖繩慰安旅行ーみんな喜んでくれました。何しろ 4 年に一回の旅行です。

もう一つの出来事は東京オフィスを作ったことです。スタッフはまだいませんが、机・電話・FAX・コピー機・パソコン・ミーティングデスクを用意し、宿泊も可能です。出版の中心地である飯田橋にあり、駅から徒歩 3 分です。私の最初の挫折といえば、大学進学するとき東京へ行けなかったことです。高校時代、東京へ行きたい、東京で暮らしたいといつも思っていました。大人になって出張や単身赴任の形ではよく出かけました 7 が、やはり異邦人でした。あれから 37 年、やっと念願がかなったかなという気持ちです。あまりにも遅すぎる話ですが、東京オフィスにはそんな思いが込められています。

しかし去年の成果は、私が言うのもおかしいですが、何と云っても、エディットの若いスタッフがビジネスマナーも含めて、編集技術面でもめざましい成長を見せてくれたことです。いま 20 歳代が 13 人、30 歳代前半が 3 人いますが、正社員比率で約 7 割を占めます。彼らがよく頑張ってくれたおかげで、なんとか未曾有の仕事もこなすことができました。よくプロダクションは即戦力が必要と言われます。また若い人を育てる余裕はないとも言われます。東京のプロダクションを見てみると、即戦力の採用は多いし、スタッフもベテランぞろいです。名古屋ではそれはむしろ少ないし、私の主義にも合いません。個は滅びるけれども種は残る。組織は若い血を入れることによって活力を維持し、再生・発展することができます。エディットはいま創立 13 年になりますが、むしろこれからの楽しみな会社です。

今年の賀状は自慢話ばかりになり、恐縮です。個人的には今年も多忙を極めました。最大の楽しみである愚犬 JOY の散歩もあいかわらず月 1～2 回です。それでも明日を心配しない生きものの姿や散歩道の風景に接していると、いまの自分が楽になり、気持ちが落ち着いてきます。

東奔西走はあいかわらずです。編集の講師業は 17 年で辞めましたが、AJEC の仕事（？）が忙しくなりました。今年から副理事長の立場になり、理事会・部会・例会・経営研修・編集セミナー、そのための事前の打ち合わせと飛び回っています。でもそれがたいへん勉強になり、刺激になっています。それにエディットのクライアントさんの 70 %が東京にありますので、私にとって、東京はいつの間にか名古屋以上に馴染みの街になってしまいました。私はいま 55 歳。これから Go! Go!です。そこで今年のキーワードを「すべてにバイタリティを！ Go! Go!」にしました。どうでしょうか。

<2004年元旦>

あけましておめでとうございます。おだやかな新年を迎えられましたでしょうか。昨年の賀状で「世の中、暗い事件と不穏な動きばかりで、妙に嫌な予感がする」と書きましたが、ますますその感を強くするこのごろです。「人類」という生き物は、これからどうなっていくのでしょうか。

編集稼業 34 年、エディットを作って 14 年目になります。みなさんのおかげで今年も新しい年を迎えることができました。いま振り返れば、気障な言い方になりますが、私自身は「夢と危機感」をバネしてやってきたような気がします。

早く一人前の編集者になりたい、名古屋の地で編集プロダクション業を成り立たせたい、編集を志す若い人を育てたい—それがエディットを作ったときの私の夢でした。しかし変動の激しい業界では 1 年先どころか半年いや 1 か月先もわかりません。いつも不安と心配がつきまっています。とにかくあまり先を考えず、その日その日を一生懸命に生きること、大海の小舟であることを自覚し、沈まないように無我夢中で漕ぎ続けること—そんな思いをいつも抱きながら生きてきました。

昨年は業界もたいへん厳しい年でした。そのためエディットは高校教材を中心に、資格本・実用書・ムック・雑誌作りにも挑戦してきました。幸いクライアントにも恵まれ、継続的な受注が可能になり、若手も育ち、新しい柱ができつつあります。今までは 4 年に 1 回しかできなかった社員慰安旅行も、昨年に引き続いて実施でき、2泊3日の「四国の旅」を楽しむことができました。忘年会もゲストを含めて参加者が過去最大の 50 名を越え、盛り上がりました。

今年は小学校教材の改訂期に入ります。エディットでは社員一人ひとりが主役になる年です。今までは、私が中心で外回りをし、仕事の流れを作り、会社のルールを敷いてきました。しかし昨年からは、社員みんなが東京や大阪を含めて営業や打ち合わせで積極的に外に出るようになりました。版元の担当者と直接面談して交流するようになりました。

その活動を今年はさらに活発にし、社員一人ひとりが本格的に業界にデビューし、活躍してもらいます。「20～30 歳代は『勝つ戦い』を、40～50 歳代は『負けない戦い』をせよ」とよく言われます。攻めと守りのバランスを大事にして、若い人のエネルギーを伸ばす—それが今年のエディットの課題です。だから会社は今年も Go! Go!です。しかし私は少し Go slowly!になろうかなと思っています。

先日も京都出張の次の日、休日だったせいもあり、帰りはローカル線にしました。乗り換え乗り換えで名古屋まで 4 時間近くかかりました。しかし行きの新幹線では見えな

い風景を堪能することができました。よく「心の傷を治すには“時間薬”が必要」と言われます。新しいことを発見したり、人の気持ちをじっくり理解するにもやはりゆったりした時間が必要でしょう。また『負けない戦い』にも Go slowly!の精神が大事なような気がします。

そう思うようになった理由は昨年、親しかった人が何人かこの世を去ってしまったせいかもしれません。「日暮れて道遠し」――すべての人がいつか味わう思いを近ごろ感じ始めたせいかもしれません。

でも、会社は Go! Go!, 社長は Go slowly!――なんと勝手なスローガンでしょう。

<2005年元旦>

また新しい年がやってきました。お変わりありませんか。最近「人は生かされている」ということをつくづく感じます。自分の思うような人生を送ることができる人はほんのわずか。人を殺戮するために軍隊に入ったわけではないのにいつの間にか戦場で殺し合いをしていたり、幸せな家庭生活が突然に拉致や誘拐や強盗で一変したりと、テレビや新聞記事を見ても、人生は思わぬアクシデントに満ち溢れています。私の回りも、同じ世代やもっと若い人が心半ばで突然この世を去ったり、病気で倒れたり悔しい思いをしています。

大晦日や初詣がたくさんのお参拝客であふれるのも、この一年「無事に生かされてきた」ことに感謝し、今年も「無事に生きていけること」を祈るためでしょう。私もこの一年何とか健康でまあまあ元気で過ごせたことを真っ先に感謝しています。エディットも同じです。とりあえず無事に新しい年を迎えましたが、一年前に予想したとおりに仕事が入り、それをこなしてきたわけではありません。さまざまな新しい「偶然」に支えられて、何とか乗り切ってきたといえるでしょう。

昨年は東京行きがぐーんと増えました。毎週後半はほとんど出かけていました。東京のクライアントさんが増え、日本編集制作会社協会の仕事も兼ねて東京に出張し、東京オフィスに常駐するようになったからです。この賀状も東京オフィスで書いています。確かに「思い」としての東京への憧れは高校時代から持ち続けていましたが、さまざまな「偶然」と日々の仕事の流れで東京行きが増えてきたようです。いまでは社員もだれかが毎週、東京へ出向くようになりました。

思い出せば、学生時代に愛した詩人・谷川雁は「東京へ行くな、ふるさどをつくれ」と言い続け、革命の拠点をつくらせと訴えました。しかしそうした言葉はいつの間にか私の頭の中から風化し消えていました。確かにいま「名古屋を拠点として」活動していますが、それは私の思想的意ではなく、まったく偶然の流れの中でそうになっているにすぎません。

私は「偶然」を「縁」と呼び、それを「運命」として受け止めるように社員にいつも話しています。「DESTINY は人生と同じ。それは一度だけだから、大切にしないといけない」と教えてくれた人がいます。生かされている日々の運命を大事にするということでしょう。編集家業もさまざまな出会いの連続です。新しい名刺も毎月 20 枚以上はふえています。その 1 枚 1 枚を大事にしようということです。

東京にいと、お店や食べ物、生き方など あらゆる面で「一流」を意識させられます。仕事で言えば、どんなテーマやジャンルでもきちんと「一流の本」として仕上げる感性です。口で言うのは簡単ですが、実際にそれをきちんと身につけることはたいへんです。出版・編集の活動はとくに東京に集中しており、名古屋で「編集の一流をめざす」にはまず東京のノウハウをきちんと盗むことです。昨年末のエディットの忘年会は70名近くになりました。東京からも何人か出版・編集関係の人にゲストとして来てもらいました。

昨年の最大の思い出は、仕事で大連、観光で蘇州、杭州、上海と回ったことです。友人が送ってくれた「働いた俺にはあるぞ夕涼み」(吉川英治)の句に支えられて、思い切っって出かけました。中国の街と人のエネルギーには驚きました。今年も機会があれば、新しい世界をぜひ見てみたいと思っています。いま中国で「情愛大使」とか「愛の毛沢東」と呼ばれ、作品の人気のたいへん高い作家・渡辺淳一氏は50歳以上を「人生で最も輝く世代(プラチナ世代)」と呼び、一流のおしゃれ、一流の人生、一流の恋愛をしようと呼びかけています。いまから思想的情熱を回復するのは難しいけれど、今年に人間的情熱を大切に「生かされて」行きたいと思ひます。

初夢は 異国の街で 思ひひと

<2006年元旦>

一休禅師が「めでたくもありめでたくもなし」と詠んだ「正月」がまたやってきました。さて今年にどんな元旦を迎えられたでしょうか。できるだけ夢と希望に満ちた新年でありたいものですが、彼に「元旦や冥土の旅の一里塚」と言われてしまえば、寂しくもあり、妙に納得もしてしまうこのごろです。

21世紀になって、時代はますます病んでいるようです。前世紀には皆無だった、言葉だけでも恐ろしい「自爆テロ」の記事が新聞によく載ります。こうした「闘い」をしなければならぬ人々が現実にいることに、いまの時代の矛盾と無力を感じます。

昨年も、数日間ではありましたが、アジアの街を垣間見る機会がありました。どの街も猥雑な中にたくましい生命力が満ちあふれ、人々の、言葉や理屈でない「必死に生きる光景」にいたく感動しました。それは自分の小さいとき、身近に確実にあった、プリミティブなエネルギーと言っているでしょう。そのパワーこそがいまの閉塞した状況を変え、またいつか新しい時代を作っていくような気がします。今年こそ遠い見知らぬ街を歩く機会をできるだけ作って、その「力」を感じ取ってきたいと思っています。

エディットは16年目の正月を迎えました。それまで7年サイクルで人生の転換を経験してきた自分にとっては、16年間同じ環境にいることはとても不思議です。ただ環境が変わっても「編集」という稼業を36年間なんとか続けられたことは幸運でした。おかげでいろいろな人に恵まれました。

昨年のエディットは多忙を極めました。1年勝負の中学教材改訂作業と、少しずつ定着してきた一般書・実用書・資格本の仕事が重なり、スタッフも50名近くになりました。

私の東京行きもますます多くなり、週の後半の東京暮らしも板についてきました。東京に負けない編集会社を名古屋の地に作りたいー創業時の夢はいまでも変わりません。いろいろな出版社さんやクライアントさんに助けられて、今年も新しい年を迎えることができました。

エディットのキーワードは「縁」です。会社カタログの表紙にも篆(てん)書で「縁」をデザインしてあります。私のもっとも大事にしている言葉ですが、「縁」は「円」「宴」「焰」「艶」と広がっていきます。今年は新たに「伝」という言葉を付け加えてみたい気がしています。「伝える」という意味です。「コミュニケーション」と言ってもいいでしょう。編集者にとってもっとも大切な能力の1つですが、エディットも若い人が増えました。たいしたことをしてきたわけではありませんが、自分なりに考えたり、悩んだり、苦勞したり、失敗したりしたり、工夫したりしたことを、できるだけきちんと伝えていきたいと思っています。

いま新聞紙上で、いわゆる大量定年退職者が出る、いわゆる「2007年問題」で「団塊の世代」がよく話題に出ます。同世代の先端に行く私にとっては、今年からの大きなテーマの1つです。「団塊」とは単なる塊(かたまり)ではなく、他に大いに影響を与える集合体＝モジュールであると残間里江子さんが言っていましたが、これからの自分の人生や行き方、生活を考え、構築するためのキーワードであることは間違いありません。先日、思い立って「dan-net.jp」というドメインを取得しました。「団塊の世代のネットワーク」という意味です。「思い余りて行い難し」は私の性分ですが、何とか少しでも「dan-net.jp」のウェブサイト成形していきたい。それが今年の大きな夢の1つです。

初夢は アジアの旅と ダンネット

<2007年元旦>

「めでたさも中くらいなりおらが春」と新年を詠んだのは同姓の小林一茶です。「中くらいのめでたさ」とはどんなめでたさなのか、具体的にはよくわかりませんが、庶民派の俳人らしい句で、妙に納得させられます。

さて今年はどうな正月を迎えられたのでしょうか。やはりできるだけ穏やかで希望に満ちた年でありたいものですね。

昨年のエディットはたいへん幸せでした。教材部門、一般書部門ともにたくさんの仕事に恵まれました。それだけでなく春は中国・大連へ社員DTP視察研修旅行、夏は東京国際ブックフェアへ出展、秋は大阪・難波花月と神戸・有馬温泉へ社員慰安旅行と、いろいろな行事を行うことができました。

大連旅行では、春とはいえまだとても寒い時期でしたが、数年前から組版の仕事をお願いしている中国の人たちと直接に交流ができ、たいへん良い刺激になりました。

東京国際ブックフェアでは、今年から日本編集制作会社協会が主催した「編集制作大賞」で、エディットの作品「脳を鍛える書き込み式『地図ドリル』」がグランプリを受賞しました。おかげで、同シリーズだけでなく他の一般書部門の仕事も大いに増えました。

関西の慰安旅行では、難波花月の漫才・落語・芝居を満喫し、3時間笑い放しで、仕事から笑いの少ない日ごろの憂さを吹き飛ばすことができました。

また、昨年は、社内の大改装と模様替えを行い、17年ぶりの「エディット新装開店」を実現し、再スタートを切ることができました。

これもおおぜいの皆さんに助けられたおかげです。本当にうれしく思っています。

私の今年の元旦の個人的な心境としては、学生時代いちばん好きだった詩人・黒田三郎の詩の一節に託すことができます。

「新しい航海に出る前に船は船底についたカキガラをすっかり落とすという」――「たかが詩人」という詩の一節です。

最近、人生60年近く経って、心も体も頭の中もなにか不要物がいっぱい溜まってしまった感じがしています。

編集稼業38年、受注編集業24年、会社を作って17年、今年はなにか「新しい航海」に出てみたいという気持ちが強くなっています。

昨年の初秋、ガイド付きですが、一人で中国・瀋陽を旅行しました。この歳になって初めての海外一人旅で、恥ずかしい話ですが、驚くほど強烈な印象と充実した緊張感を味わいました。そのせいでしょうか。急にもっともっと自分を変えてみたいと思いました。

「新しい航海」――さて何ができるかまだよくわかりません。でもとりあえずせめてあちこちに溜まった「カキガラ」を取り除く作業から今年は始めてみようと思っています。

初夢は アジアを旅する 三頭火

<2008年元旦>

ほうらいの山まつりせむ老(おい)の春――「還暦」「元旦」「俳句」の3語をセットにして検索したら、この句を見つけました。蕪村が60歳の正月に詠った、「老いの春」を祝う句です。「ほうらい」とは不老不死の仙人が住む蓬莱山のことで、「宝来」（宝がやってくる）をも意味するそうです。

さて今年の正月はいかがでしょうか。毎年「穏やかで希望に満ちた年」を願いますが、なかなかそのようには行きません。嬉しいこと、嫌なことが見事に交互にやってきて、心休まる日がありません。

昨年のエディットは特別に売上げが良かったわけではありませんが、「教材づくりのノウハウを一般書へ」をスローガンに、教材部門と一般書部門が連携して業務を進める体制を作り、けっこう忙しい一年でした。

今年も東京国際ブックフェアで日本編集制作会社協会の「編集制作大賞」で、エディットの作品『脳を鍛えるインド数学ドリル』が2年連続のグランプリを受賞し、「ドリルもののエディット」と言われるようになりました。

そのおかげもあって、いままで名前だけだった飯田橋の東京オフィスを小さいながらもきちんと業務ができる本格的な事務所に作り替えることができ、社員も常駐するようになりました。

私の東京のねぐらも飯田橋から神楽坂に移し、毘沙門天を横に見ながら通勤していま

す。ご存じのように飯田橋や神楽坂は出版活動のメッカで、あこがれの街です。長年の夢がやっと一つ叶いました。

昨年の賀状に「新しい航海」と書きました。還暦を迎えるにあたり、色あせたしがらみや染みついた汚れを取り払い、心身ともにリセットして、五木寛之が人生の黄金期と書いた「林住期」を生きたいという思いでした。彼の言う「自己本来の人生」がどんなものかはよくわかりませんが、自分自身のための人生として、旅や趣味を楽しみ、日々をゆったり送りたいと思ったのです。

しかし現実には逆になってしまいました。昨年9月に還暦を迎えたとたん、東京と名古屋を毎週欠かさず往復する生活になり、休まる暇がありません。

当たり前です。「林住期」とは本来は家を出て森林の民になり自然の恵みを食して生きる生活なのに、都会のど真ん中で時間に追われ、締め切りに悩まされ、人に会い続ける日々ですから、まったく逆の「臨終期」のような暮らしです。いまの稼業を辞めないかぎり、「新しい航海」なんてやはり無理だと悟りました。

せめて一瞬であってもいい、わずかな時間であってもいい、忙中に閑を見つけて、できるかぎり自分のための時間を持つようにしようと思いました。

昨年はたった一度の海外旅行でしたが、同じ稼業の人と中国は北京・大連の旅を楽しみました。北京では世界遺産の天壇公園、天安門広場、故宮、頤和園、万里の長城、古き良き北京の胡同(フートン)と廻り、北京ダック、四川火鍋料理を賞味、大連では大連港やロシア風情街、星海公園、大連商城を歩き、餃子料理や海鮮料理を堪能しました。

やはり到底「アジアの山頭火」にはなれませんが、今年は「林住期」を含めて人生の四住期を説いたインドの旅からスタートできそうで、いまとてもわくわくしています。

初夢は ガンジス川の 沐浴姿

還暦に ベナレスめざし 厄落とし

<2009年元旦>

世の中が急におかしくなってきましたが、今年のお正月はいかがでしょう。

エディットは19年目の正月を迎えました。7年サイクルで職場が変わってきた私の過去の人生で、19年間これほど長く続くとは思いませんでした。

危機感をできるだけ前向きな心に換え、バランス感覚を大事にしてやってきたつもりです。

学参・教材の編集を武器に、少しずつですが、ジャンルを広げてきました。最近は「一般書」といわれる分野も業界大手の版元さんから継続的に仕事をいただくようになり、昨年も相変わらず忙しい一年でした。

東京オフィスもスタッフが増え、昨年暮れの12月16日に同じビルの7階に引っ越しました。およそ2倍の広さです。

今どき業務拡張などと響きを買うばかりで内心は不安だらけですが、「なんとかなるだろう」と生来の楽天主義が決断させました。けっこうゆったりしたオフィスです。飯田橋あたりに来られたら、ぜひ立ち寄ってください。

昨年は週の後半の神楽坂暮らしが定着してしまいました。さすが「神が楽しむ坂」です。居心地が良い街です。デパートも量販店もありません。ふつうのお店が一店一店、個性を大事にしています。人が中心の街です。

昨年の賀状に「林住期」と書きました。いまは楽しい「街住期」です。遠くに東京タワーを眺める「隠れ家」で過ごす時間は、申し訳ないけれど、快適です。

こんな生活がそんなに長く続くとは思いませんが、先のことはあまり気にせず、「今」を楽しもうと思います。

昨年の収穫は1月のインド旅行と8月の青森「ねぶた」見物でした。目を閉じると、今も鮮やかに思い出されます。

人類の歴史と文化が多様に集約された「インド」、生の発露が勇壮な姿で表現された「ねぶた」、ともに一生残る体験となりました。

今年はいったいどうなるでしょう。何か大変な年になる予感がします。「初心に戻れ」という内心の声が聞こえます。「大海の小舟」の意気込みを持って、まだまだ現役を続けていく必要を感じています。

初夢は ほろ酔い姿の 毘沙門天

<2010年元旦>

新しい年がまた始まりました。今年も賀状の文をつづることができる幸せを感じています。でも昨今あまり良い話を聞きません。

「生き残りを図ろう」――唯一前向きな言葉がこれです。でも考えてみれば、生き物はすべて生き残りをかけて日々必死に生きているわけで、当たり前前の行為です。

「生き残り」という言葉を耳にして思い出すのは**ダーウィンの言葉**です。「いちばん速く走るものが勝つわけではない、いちばん強いものが勝つわけではない。常に変わるものが残るんだ」。変化に適応する能力――それが生き残る道であり、「**進化**」だということです。

今年のエディットをつくって**20年**。会社を大きくしようとか、一番になろうとか、何か目標があったわけではありません。流れの中で**編プロ家業**を決断し、与えられた仕事を一生懸命にやってきて、いつの間にか**20年**という感じです。何とか生き延びてこられたのは、試行錯誤しながら、そのときそのときの状況に必死で取り組んできたせいだと思います。

今年はそのような**変化に適応する能力**がさらに求められるでしょう。前向きにがんばろうとしている版元・クライアントさん、社員・スタッフ、外部の仲間と**新しいスタート**を切りたいと思います。

神楽坂 空車の列を 横に見て――昨年も東京一名古屋の**二重生活**が続きました。還暦過ぎの一人暮らしに不安はよぎりますが、くたばるときはどこにいてもくたばる、と思いつめて、今のスタイルを可能な限り続けて行くしかないと思っています。

昨年の私の個人的な報告はやはり旅行の話になってしまいます。外国では**イタリア**(ローマ・フィレンツェ・シエナ・ボローニア)、**韓国**(ソウル)、**インドネシア**(ジョグジャカル

タ・バリ)ほか1か国。国内は群馬県の猿ヶ京温泉，青森県の五所川原ねぷたと下北半島・恐山，富山県の八尾「おわら風の盆／前夜祭」と石川県・金沢への一人旅。ほか東京暮らしを利用して浅草のカーニバル，高円寺の阿波踊り見物にも出かけました。

どれも楽しく思い出しますが，初めてのヨーロッパ体験(といってもイタリアの一部だけですが)は，以前に訪れたインド・タイ・ベトナム・中国，今年の韓国・インドネシアのアジアの国々と比べ，その異質性に強い刺激を受けました。

国内では我が「青春の城下町」金沢。大学の同窓会を兼ねた旅でしたが，親友や当時の先輩に再会し，お互いまったく別の世界を生きながらも，会った瞬間に40年前に戻るなんて，その不思議さと「光陰矢のごとし」の感に酔いながら，また香林坊・片町を一人歩きながら，「今の自分」へのある種の納得を旅の土産としました。

初夢は バルサの上で ゆらゆらり